

『フォークランド戦争史』の発刊について

石津 朋之

既にご案内のように、平成 23 年 9 月 1 日に防衛研究所は組織改編を行いました。その目玉の一つが戦史研究センターであったのですが、従来の戦史部という呼称を戦史研究センターに変更すると共に、それまでの 2 個室体制を大幅に拡充し、戦史研究室、安全保障政策史研究室、国際紛争史研究室、そして史料室の計 4 個室体制になりました。

新設された国際紛争史研究室は、まさに古代ギリシア・ローマ時代から今日に至るまでの諸外国の戦争及び紛争の歴史を研究することが任務になっておりますが、組織として最初に着手したのがフォークランド戦争史でした。

これは、平成 24 (2012) 年にフォークランド戦争開戦 30 周年という節目を迎えるに当たってイギリスで当時の公文書の開示が始まることを視野に入れていたこと、防衛省・自衛隊内の教育機関に対する事前のアンケート調査で、フォークランド戦争研究への要望が一番多かったこと、そして、日本でも島嶼防衛に対する関心が高まりつつあったこと、などの結果です。以降、戦史研究センターでは平成 25 年度末の刊行を目指に『フォークランド戦争史』を執筆してきたところです。

既に平成 22 年度から始まっていたこのプロジェクトの具体的な作業内容ですが、平成 22 年度は本格的な執筆の準備段階として、フォークランド戦争をめぐる研究史の整理を行い、それを踏まえた上で、平成 23 年度及び 24 年度はメンバーがそれぞれの担当部分の執筆を行いました。そして、平成 25 年度は『フォークランド戦争史』の編集作業に充てました。

本プロジェクトのメンバーですが、国際紛争史研究室長の石津朋之を主査として、小谷 賢 (同室主任研究官)、宮原靖郁 (同室所員[2 等海佐])、餅井雅大 (同室助手)、さらには、以前は戦史研究センターに所属しており、現在は航空自衛隊幹部学校教官の柳澤潤 (2 等空佐)、の 5 名で構成されています。

『フォークランド戦争史』の章立て及び執筆担当は、以下の通りです (予定)。

はじめに——『フォークランド戦争史』刊行に寄せて (石津)

序 章——フォークランド戦争とは何だったのか? (石津)

第 1 部 フォークランド戦争の外交的側面 (小谷)

第 1 章 フォークランド問題の起源

石津 『フォークランド戦争史』の発刊について

- 第2章 1970年代の交渉の進展と停滞
- 第3章 サッチャー政権以降のイギリス・アルゼンチン関係
- 第4章 危機の外交
- 第5章 メディアの側面 (餅井)

第2部 フォークランド戦争の軍事的側面

- 第6章 イギリス軍およびアルゼンチン軍の状況 (柳澤)
- 第7章 統合作戦の観点から見たフォークランド戦争 (宮原)
- 第8章 海上作戦の観点から見たフォークランド戦争 (宮原)
- 第9章 陸上作戦の観点から見たフォークランド戦争 (柳澤)
- 第10章 後方 (兵站) の観点から見たフォークランド戦争 (餅井)

第3部 現代に対するイプリケーション (石津、小谷、柳澤)

- 第11章 政治及び外交の次元でのイプリケーション
- 第12章 軍事の次元でのイプリケーション

おわりに (石津)

『フォークランド戦争史』執筆の間、イギリスで新たに公開された史料調査のため、メンバーが数回にわたり海外出張を行うと共に、フォークランド戦争をテーマとした国際会議にも積極的に参加しました。また、国外より著名な歴史家を招聘してこの戦争に関する研究会も開催ましたが、その中でも、フォークランド戦争の公刊戦史を執筆したローレンス・フリードマン卿（ロンドン大学キングスカレッジ副学長）及びこの戦争に関する多くの著作があるスティーヴン・バズィー博士（ウーヴァーハンプトン大学教授）の研究会は、メンバーの執筆作業に多くの有益な材料を提供してくれました。

それ以外にも、例えは財務省に対するブリーフィングや統合幕僚大学の一連の講義を通じて、フォークランド戦争に対するメンバーの理解について何度も検証する機会を得ることができました。

さらには、平成25年度「戦争史研究国際フォーラム」のテーマを「島嶼問題をめぐる外交と戦いの歴史的考察」と定め、その中の一つのセッションでフォークランド戦争を取り上げることにより、執筆メンバーの2人がこれまでの研究成果を発表する機会を得ました。

また、今回のプロジェクトで執筆メンバーは、定期的に勉強会を開催し、各自の報告と

それに対する他のメンバーのコメントを行うことで、研究成果がさらにプラッシュアップされたと考えております。

アジア太平洋地域における戦略環境が大きく変化する中、日本でも島嶼をめぐる紛争の解決策に対する関心が高まりつつある今日、この研究成果が日本の防衛政策及び防衛省・自衛隊内での教育に資するところは、決して小さくないと自負しております。

つまり、1982年のフォークランド戦争を題材としながらも、歴史的視点からこうした問題に直面して当事国がいかに外交的に対応し、そして、必要に迫られ実際にいかに戦ったかについて分析することにより、今日の日本が直面する安全保障問題に適切に対応するための示唆を提供できると期待している次第です。

最後になりましたが、今回の『フォークランド戦争史』の執筆メンバーを代表して、渡邊剛戦史部元所員（退役2等空佐）に深く御礼を申し上げたいと思います。渡邊氏は、今回の執筆には直接的には関係していませんが、このプロジェクトの準備段階において、フォークランド戦争に関する史料調査を積極的に行ってくれました。渡邊氏の地道な調査がなければ、今回の研究成果に結びつくことはなかったと思います。

(防衛研究所戦史研究センター国際紛争史研究室長)